

54期台湾研修旅行実施報告

大 山 裕 隆 (外国語科)

菊 地 明 範 (国 語 科)

小 泉 尚 子 (国 語 科)

I はじめに

54期の研修旅行の行き先は台湾となった。学年の生徒全員を一度に海外に引率するのは、本校初めてのことである。この年度以降、本校の研修旅行は当分の間台湾に行くことになった。この紀要原稿を執筆している段階で、55期の研修旅行もすでに終了しており、生徒に異文化体験をさせることのできるこの研修がこれからも続いていくことを願っている。

本稿において、まず実際の行程について大山が大まかな流れについて説明する。実施をしたことで見えてきた課題などにも言及していく(Ⅱ章)。次に、3日目の夜に行われた、「友愛会」の方々との交流について菊地がその経緯と実施について述べていく(Ⅲ章)。最後に、事前・事後学習について、単なる物見遊山の旅行ではなく、あくまで「研修」として、生徒たちに異文化体験を通じてどのようなことを学ばせ、それを定着させていったか、小泉が報告する(Ⅳ章)。

Ⅱ 実際の行程

1. はじめに

本章では、3泊4日の行程を追っていくことで、生徒たちへの教育効果や、直面した問題などについて述べていきたい。初めて海外に学年全員を連れていく研修旅行ということで、引率の先生方には多大な負担をかけてしまった点もあった。この場を借りて、お詫び申し上げたい。

2. 1日目 2018年1月10日(水)

台湾の研修旅行を始めるにあたって、計画当初から私たちの頭を悩ませた問題は、300名以上を一度に乗せることのできる飛行機の確保が難しいことであった。沖縄への研修旅行では、羽田空港に全員を同じ時間に集めればよかったので、それと比べると生徒の把握や指導にはより大きな注意力を必要とした。台北への移動は、成田から1便、羽田から時間をずらして2便に分かれて出発した。学年の先生方のお力とご協力で、非常にスムーズに出国手続き・荷物検査・搭乗などを済ませることができた。

おおむね順調だったが、小さなトラブルがなかったわけではなかった。まず、羽田空港に向かうモノレールの中にパスポートが入った荷物を置いてきてしまった生徒がいた。幸い心ある人が届けてくれたようで、事なきを得た。また、成田空港に向かう電車に乗る際、特急ではなく普通電車を利用してしまい、遅刻した生徒もいた。こうした事故を未然に防げるように、よりしっかりとした生徒指導が必要であると痛感した。

初日は、台北に到着後、龍山寺や孔子廟を見学した。こうしたエキゾチックな建造物に生徒たちは興味を大変示し、いわゆる「インスタ映え」する場所をみつけては盛んにスマートフォンで写真を撮っていた。夕食は広東料理のレストランであった。台湾の食事なので薄味であったり、八角などの香辛料が苦手だったりする生徒がいたが、それも含めて異文化体験なのではないかとも思った。一つ反省点として挙げられるのが、食事会場に到着するのが飛行機やバスごとにずれていたのだが、会場側の都合で長時間待たされてしまったグループが出たことである。この点においては、しっかりと旅行会社と事前に打ち合わせをしておくべきであった。

初日は、移動に多くの時間を取られたため、あまり多くの研修はできなかったが、出入国の手続き、バスの車窓から見える異国の風景、絢爛豪華なホテルに、生徒たちは大変刺激を受けていたようである。

3. 圓山大飯店について

圓山大飯店に宿泊することは、生徒たちに大きな感動をもたらしたようだ。到着した時間帯にはもう暗くなっていたので、小高い丘の上に建ち、ライトアップされた圓山大飯店の壮麗な姿をバスの車窓から見た生徒たちからは歓声が上がった。エントランスに入ると内部は真っ赤でエキゾチックな装飾が施され、生徒たちは盛んに写真を撮っていた。

沖縄などの研修旅行と同じように、ロビーにツアーデスクを置くことができ、委託業者のJTBがホワイトボードに連絡事項などを書いてくれた。ツアーデスクに据え付けられた電話で各部屋に連絡を取ることができる。

部屋は歴史を感じさせる外観とは対照的に、モダンな中華風の内装で、2人部屋にしては広く、生徒たちはリラックスできたようである。

バスルームは日本にあるホテルとはかなり違うものである。下図のようになっており、トイレとシャワールームが別になっている。最も私たちを面食らわせるのは、間の通路を挟んでバスタブが独立してあることである。そのため、入浴する場合はまずバスタブに湯をはり、シャワールームとバスタブの間にゴムマットと大きなタオルを置き、それからシャワーを浴びる。体を洗ったら、バスタブにつかり温まるということになる。変わっているようにも思えるが、台湾の高級ホテルはどこもこのような形らしい。



(左)生徒用しおりには、このようなイラストを添えて、入浴の仕方の説明書きを載せた。(右)実際の浴室。シャワールームは別になっている。

高級ホテルなので格式高く、客のマナーに厳しいのかと思ったが、案外そうではなかった。3日目の夜にロビーの大きな階段で生徒たちが騒いでいてもホテル側からは何も言われず、拍子抜けした場面もあった。他の一般の団体客も大騒ぎをしていることもあり、出発前に思っていたよりもずっとおおらかな側面もあるホテルである。

朝食は洋食を中心としたビュッフェ形式で、生徒たちはよく食べていた。地下にある特設の会場で、様々な食事を楽しむことができた。

このホテルを研修旅行で使うことの一の問題は、各部屋にいる生徒の把握が難しいことである。部屋割りが来るのが台湾到着後であり、生徒たちの滞在しているのと同じ階に一般の客が滞在していることがある。また、圓山大飯店にはエクストラベッドが20台しかなく、ほとんどの部屋が2人部屋となり、担任の先生方には、生徒の見回りの際に大変なご負担をかけてしまった。この点は今後の課題となる。

圓山大飯店に宿泊すること自体が観光であり、歴史を感じる研修である。李登輝が会議をしたり、様々な国賓が宿泊したりするこのようなホテルに宿泊できることは、生徒たちにとって大変貴重な体験であろう。

4. 2日目 2018年1月11日(木)

2日目・3日目はコース別研修であった。これはそれぞれのコースが様々な場所に行き、それらが部分的に重複することもあるので、ここでは行き先ごとに小さな項目をたてて説明していきたい。

◆二二八事件記念館・中華民国總統府

二二八事件がどんなものであったかということについては、ここでは紙面の関係上触れないが、中華民国の台湾統治の歴史を語るうえで、避けては通れない出来事である。この事件に関する様々な展示品のある記念館を見ることは実に意義深いものである。展示品の中には、中央大学を日本統治時代に卒業した

のち台湾に帰郷し、二二八事件の犠牲者になった方の制帽も展示してあった。この記念館に連れて行って大変残念だったのは、展示の説明が中国語のみで、日本語の音声ガイドも数が限られており、多くの生徒が事件の詳細を理解することができなかったことである。この点に関しては、日本語のできるガイドをつけるなど、工夫が必要であった。

中華民国総統府は、入るときに軍関係の人たちの荷物チェックがあったりすることもあって、生徒たちは緊張感をもって入館していた。日本語でガイドをしてくれる現地の方々には、日本びいきの機会が多く、様々な興味深い話をしてくれた。日本統治時代に日本人によって設計された建物ということもあって、生徒たちはよく耳を傾けていた。

◆淡水

学年全体を大きく二つにわけ、淡水コースと九份・十份コースを作った。コースわけの希望調査では圧倒的に九份・十份コースが多く、偏った形での抽選を行わなければならなかったのは、残念なことであった。しかし、始まってみると、淡水コースの生徒たちは思いのほか楽しんでいて、まずは紅毛城を見学した。様々な国の、台湾植民地支配の拠点となったこの建物の様々な施設を、生徒たちは興味深そうに見ていた。また、高台にあり景色も良かったので、たくさん写真を撮っていた。そのあと、小型のフェリーに乗って、淡水湾の遊覧に出た。思ったよりもずっとフェリーのスピードが速く、大変な量の水しぶきが出たので、生徒たちは大興奮であった。フェリーから降りた後は、淡水老街の自由散策である。様々な屋台で食べ物を買ったり、コンビニエンスストアで買い物をしたりと、現地でしかできない体験をたくさんしたようである。

◆九份・十份

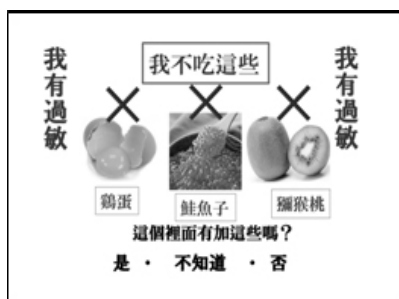
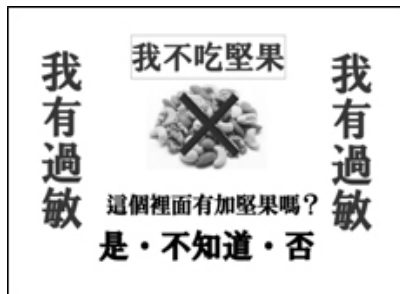
九份は、アニメ映画『千と千尋の神隠し』の舞台のモデルとなったと言われており、多くの台湾旅行のガイドブックなどでも紹介されていることもあって、

見学を希望する者が大変多かった。赤い提灯がたくさんかかった、『千と千尋』を彷彿させる建物の目の前のレストランで昼食をとったこともあり、生徒たちはとても興奮した様子だった。有名な観光地であるため、とても混雑しており歩くのも大変な状態であったが、生徒たちは買い物や観光を楽しんでいたようである。

十份は、街の真ん中に線路が通っており、その線路の上を人々が行き来できる、ユニークなところである。この線路の上で、大きな紙でできたランタンの内部に火をつけ、それを空高く飛ばすというのが名物で、生徒たちもこれを楽しんだ。このランタンの表面に願い事を書くという願いが叶うとされており、生徒たちは思い思いの願いを書いていた。

◆食事について・アレルギー対応

この日の食事は、台湾料理と点心であった。特に小籠包や餃子などが出てくる点心は生徒たちに大変人気があった。淡水老街・九份・十份の屋台や売店で食べ物を買うことを許しており、3日目の夜市でも食事をするようになっていたので、アレルギーへの対応を各生徒にさせなければならなかった。このために、各生徒に首から下げることのできるよう紐のついた小さなクリアファイルを配布し、その中に中国語で食べることのできない食物を書いたカード（下図参照）を入れさせた。カードには食べ物が入っているかどうか判断するための疑問文が記載されており、アレルギーを持つ生徒たちは安心して食べ物を購入することができた。



5. 3日目 2018年1月12日(金)

3日目もコース別研修だが、全コースに共通するものとして、台湾の大学生と台北の街をめぐる「B&Sプログラム」を実施した。午前か午後の4時間を使って街を歩くものである。「B&Sプログラム」ではないほうの午前・午後は4つのコースに分かれてそれぞれ別の研修を行った。また、夜は饒河街夜市を訪れた。以下、それぞれ報告していく。

◆B&Sプログラム

グループに一人ずつ台湾の学生がついてくれて、台北の街を案内してもらおうというもので、生徒たちは大変楽しんでいた。行き先はグループごとに実にさまざまであった。西門街や台北101などの人気スポットはもちろんのこと、台湾シャンプーを体験してみたり、遊園地に行ってみたりと、グループごとの興味関心に従って、いろいろな体験をすることができたようだ。また、年齢の近い台湾の学生たちと交流をすることができたのも、本校の生徒たちにとって大変貴重な体験であった。日本に強く興味を持つ学生たちが引率してくれたこともあり、愉快地に交流できた話を生徒たちからたくさん聞くことができた。

◆猫空

猫空は、中国茶の名産地であり、お茶を入れるところを見る体験などができる。また、山頂に位置しているため、そこにたどり着くまでのロープウェイから見える景色が壮観であり、生徒たちは大変楽しんでいた。山の頂きにあるロープウェイの終点から20分ほど歩くと、目的地の茶芸館がある。ここでは、日本語によるお茶の作り方に関するビデオを見て、茶畑を見学し、実際に職員の方々がお茶を入れるところを見学することができる。生徒たちは日本とは違うお茶の入れ方に強く興味をひかれたようであった。

◆新竹サイエンスパーク

新竹サイエンスパークは、台湾政府がIT企業などを誘致するために作った、経済特区である。ここでは、税金などが優遇され、また帰国子女向けの学校などが整備されており、世界中から優秀な研究者や技術者を招いて、日進月歩する科学技術を牽引させようとしている。ここでは、まずサイエンスパークについて日本語で詳しく説明したのちに、この街に関するクイズ大会を催し、正解者には商品が出るなどの余興があった。また、サイエンスパーク内で生産された最新のIT機器などが展示されており、それらに実際に触れることができ、そうしたものに興味のある生徒たちは、手を伸ばして操作をして楽しんでた。

◆二二八記念館

2日目に二二八記念館を訪れなかった生徒たちが選択した。2日目よりも内容は充実しており、まず記念館に行く前に圓山大飯店で二二八事件に関して講演を聞き、それから記念館を訪れた。また、このコースは圓山大飯店にある蔣介石が作らせた、緊急時の逃走用のトンネルの見学もした。これは、早く逃げられるように長い滑り台がついた階段状の通路である。残念であったのは、2日目と同じように日本語のイヤホンガイドが少なかったことと、早朝の講演会で寝てしまう生徒が多かったことである。

◆台湾大学

グループごとに台湾大学の学生たちに、大学構内を案内してもらった研修である。これもB&Sプログラムと同じように、年齢の近い学生たちと交流できたことは本校の生徒たちにとって大変刺激になったようである。この研修は、グループごとに内容にかなり差が出てしまったのが反省点である。外交的でコミュニケーション能力の高い生徒がたくさんいるグループはついてくれた学生にさまざまな質問をし、いろいろな場所に連れて行ってもらい、充実した研修になった。体育館でスポーツをさせてもらったり、学生寮を見学させてもらったり、

校外の喫茶店などで話をしたり、大いに楽しんだようだ。その一方、4時間という長丁場を持って余ってしまったグループもあったことは残念であった。

◆饒河街夜市

この夜市を選んだのは、一本道で構成されており、生徒管理が容易だからである。生徒たちは思いのほか楽しんでいるようで、いろいろなものを食べていた。買い物をしたり、ゲームを楽しんだりして、台湾ならではの雰囲気を楽しんでいたようである。ここも生徒たちの興味・関心によって時間調整が難しいところなので、今後の課題としたい。

6. 4日目 2018年1月13日(土)

最終日は、民芸品店によって、初日に孔子廟に行かなかったグループ以外は空港に行って帰国するだけである。民芸品店はお土産を買うだけであり、45分ほどとった時間が長すぎるという声もあったが、旅行社によると、これは不測の事態に備えて少し時間に余裕を持っておくことためであると聞いて納得をした。実際、空港ではパスポートを入れたカバンを置き忘れそうになった生徒や、荷物検査時にパスポートをトレイの中に置き忘れてしまう生徒がいたりするので、早めに空港に入り、余裕を持った行程を組むことが重要である。

初めての海外研修旅行であったが、何とか生徒たちを無事に連れて帰って来ることができた。これはひとえに学年スタッフの先生方のお力の賜物である。最初にも述べたが、行程や生徒の指導の仕方には多くの改善すべき点があった。来年度以降より良い研修になっていくことを期待したい。

Ⅲ 54期学年企画「友愛会との語らい」

この研修旅行には学年企画として、台湾の日本語世代の高齢者いわゆる日本語族とのふれあいの時間を設けた。B&Sで同世代の若者との交流を図り、一方で高齢者との交流を設け、生徒にさまざまなことを感じ、思考させようとし

たのである。

この企画はかつて姉妹校の中央大学横浜山手高校（現中大附属横浜高校）の台湾修学旅行で行われたものを土台にして実現したものである。

【中川洋一郎先生講演会】

まず、中央大学経済学部の中川洋一郎先生の文章を生徒に読んでもらったうえで、中川先生の講演を聴いてもらった。中川ゼミの学生二人のお話もうかがうことができた。先生は「台湾《日本語族》との対話が日本の若者にもたらすもの」と題してお話くださった。日本の若者にとって、台湾《日本語族》との対話が一人一人の好奇心のプラグを点火させる大きな意味をもっているとおっしゃり、台湾に行くことの意義を熱く語ってくださった。そして生徒は、台湾の近代化にとって日本が果たした役割について考えるきっかけをもらったことになる。生徒にとっては今まで思い描いていたいわゆる「植民地」というイメージが揺らぐようなお話であったといつてよい。そんなお話の後で、生徒からは「日台関係をよく思っていない人々もいると思う、今後私たち（若者）は台湾の方々とのどのように関わっていけばよいと先生はお考えですか？」という質問があがった。中川先生は「それこそ、現地での体験を通して一人ひとりが考えることでしょう。」とおまとめになった。生徒は中川先生のお話をただ受け取っただけでなく、自己の問題意識の中に位置づけようとしていたようである。頭の中に疑問符が増えたような不思議な思いで話を聞いていた生徒が多かった中、このような質問をあげられる生徒がいたことは、私たちにとっても幸いであった。

【友愛会との語らい】

そして現地で、美しい日本語を守り、日台のきずなを次の世代につなげる活動を続けている「友愛会」の方々との交流会が持たれたのである。会長の張文芳氏は、ご高齢の会員にお声かけくださり、28名の会員を集めてくださった。最高齢は92歳、90歳を超えている方が6名、最年少の方が84歳であった。生

徒にとって日本にいてもこのような高齢の方々とお話をする機会は少ないに違いない。〈世代を超えた語り〉それだけでも大きな意味があろう。一方、友愛会にとってもこれほど大勢の日本の若者と話をする機会は初めてであったようだ。会員の中には京都大学を卒業した方や長く教壇に立たれていた方、白色テロで22年も獄中生活を強いられた方もいた。会員の方には、あらかじめ政治信条などのお話はご遠慮いただくようお願いしておいた。生徒にもイデオロギーに関わることの質問は控えるように伝え、日本時代にどのような遊びをしたのか、どのような食事をしていたのかなど、市井の暮らしについての質問項目をあらかじめ示していた。それでも会場には、会員の日本に対する熱い思いと、日本の若者に期待する思いが溢れ、少々古めかしい日本語で生徒を鼓舞激励する声が響いていた。

生徒は最初は戸惑い、遠慮していたが、そのうちに素朴な疑問を提示できるようになっていた。終了後生徒にはその日のうちにA4の用紙一枚に感想をまとめさせた。さまざまな感想が書かれていたことが印象的であった。日台関係を美化した部分だけが刷り込まれるというようなことはなかったとあってよい。教員が危惧していた「偏り」は生徒の中には生じなかったようである。

私たちは何かの答えや、方向を持って「友愛会」との交流を企画したわけではない。日本語族と言われる高齢の人々が存在し、その人たちと話をすることによって生徒の中に起こる「変化」を期待したのだ。自分たちが身に着けた常識や価値観が、実は絶対的なものではないことに気づくことができればよいと思った。

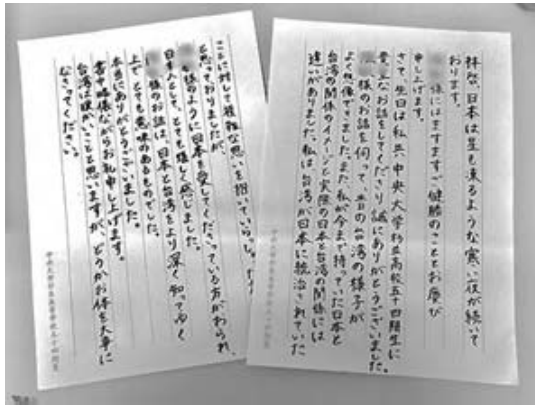
人は「今、此処」でしか生きられない。それは次の瞬間には「当時、そこ」でしか生きられなかったということになってしまう。それは時代や地域を超えてだれもが縛られる「現実」である。日本が支配している時代に台湾という場に生きていた人々から学べることは何だろう、感じられることは何だろう。答えは一つのはずがない。そのような意味で生徒一人ひとりにとってきわめて良質な教育的刺戟となった企画であったと思う。



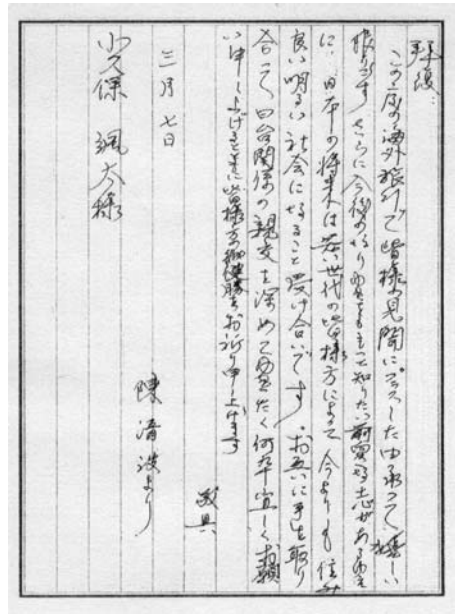
【伝統的な手紙の書き方で礼状をしたためる】

帰国後、国語の授業の一環として、友愛会の方への礼状を書くという課題を出した。生徒には伝統的な手紙の書き方に則った手紙を書くように指導し、筆書きで縦書き便箋に礼状を書かせたのである。伝統的な手紙の書き方で礼状をしたためることは現代の高校生にも意味があるだろう。「拝啓」で始まる手紙を、ある種の面映ゆさと誇らしさを持ってしたためることができたと思いたい。そして思いがけず「友愛会」の多くの方から返事が届いた。そこにしたためられていたのは、生徒のそれよりも闊達な文章と正しく麗しき水茎の跡であった。このような返事を生徒に届けることができたことは私たちの喜びであった。もちろん生徒は感激していた。感激しながら、自分にはない語彙や言い回し、美しく崩された文字にただただ驚いていた。こんな喜びも研修旅行の副産物としてきちんと記しておきたいと思う。

日本語族との交流会が、今回の研修旅行の中でも大きな意味をもっていた企画であったということができよう。



(上)生徒が書いた礼状
(右)友愛グループの方からのお返事



IV 事前事後学習について

1. はじめに～事前事後学習で何を学ばせるか～

本校ではこれまでも、1年次から約1年半の時間をかけて研修旅行の事前学習を行ってきた。主な学習内容は、LHRの時間を利用した講演会開催や、自分達が訪れるコースの調査活動等である。今回、学年単位での全員参加型海外研修旅行の実現にあたり、事前事後学習で何を学ばせるべきかということを変更して系統立てるの必要性があると感じ、企画の内容やねらい、実際に開催した時期を以下の表のようにまとめてみた。

学年	企画名	内容	ねらい
1年	帰国生の話を聞く会 (2016年9月28日実施)	帰国生による海外生活の話を聞く。	「世界を知る」「世界に飛び出す」ことに意識づける。
2年 1・2学期 (研修旅行前)	中大経済学部中川教授講演 (2017年9月1日実施) 映画「トロッコ」鑑賞 (2018年10月11・18日実施) 飯塚容校長講演 (2018年11月22日実施)	「台湾で何を学ぶか」の講演を聞く。 台湾映画を鑑賞する。 「映画で知る台湾」の講演を聞く。	台湾に特化したお話を聞いたり映画鑑賞をしたりすることで、世界における台湾の位置づけや日台の関係、台湾の文化を学び、台湾に行く意味を考える。
2年 3学期 (研修旅行後)	台湾研修報告会 (2018年2月14日実施)	各訪問先の報告と調べ学習の成果を発表する。	研修旅行を振り返り、それぞれが旅行の意義を改めて考える。

従来無かったのは、1年次に行う「帰国生の話を聞く会」と2年3学期に行う「台湾研修報告会」である。「帰国生の話を聞く会」は、「台湾」という1つのスポットに赴くのではなく、「世界」に一步踏み出すだということを意識づけるための会として企画した。「台湾研修報告会」は、研修旅行を改めて振り返り、意義を言語化し皆で共有するための会として設定した。実際、どの企画も無事実施することができ、それぞれが有意義な学習となったと言える。次節以降、各学習の内容と生徒の感想等を報告したい。

2. 事前学習

(1) 「帰国生の話を聴く会」

1年次の9月にLHRの1時間を使い、帰国生が壇上でスライドを使用しながら、自身が経験した海外生活についてスピーチする企画を実施した。世界の国々の生活様式、文化、多様な価値観等について実感のこもった言葉で紹介してもらいそれを聴き合うことで、全ての生徒に「世界」を意識してもらうことがねらいである。

実施の3週間ほど前に海外生活経験者を募ったところ、40名超の生徒が集まった。本企画の趣旨を伝え、登壇者を募集すると、9名の生徒が名乗りを上げてくれた。スライドやスピーチ原稿作成を指導し本番を迎えたが、9名の生徒は実に堂々と自身の経験や日本とは異なる海外の様子を話してくれた。ある生徒（バンコク在住経験者）はワクシン派と反ワクシン派の対立やデモによりしばしば学校が休みになったことを、またある生徒（UAE在住経験者）はイスラム圏の生活の様子を、ある生徒（台湾在住経験者）は台湾の豊かな食文化を紹介してくれた。台湾在住経験者の生徒は、中国語のピンインの発音のデモンストレーションも行ってくれた。最後は菊地教諭が台湾の研修旅行で訪れる二二八記念館や圓山大飯店の写真を紹介しながら、台湾に行つて学ぶ意義を語り、研修旅行への機運を盛り上げた（写真参照）。

話を聴いた生徒からは「私は海外へ行ったことがないので、文化や価値観の異なる場所へ行くことが怖いと感じていました。でも今回、自分の友達の話を書いたことで、海外の良い面、悪い面を知り、研修旅行を通して海外にふれてみたいと思えるようになりました。研修旅行を楽しめるよう、もっと様々なことを知りたいです。」「国によって風習や常識が違うというのは当然のことだが、身近な立場の友人から異国の話を聞くことで、そのことを再認識しました。自分が海外へ行く時には先入観を捨てて、文化をよく取り込んで、色々な見方ができると良いと思う。」「日本の価値観ばかり考えるのではなく、日本とはどのような違いがあるのだろうか？日本がしたことは？など、新たな視点で学んでいき

たいとこの会を通して思うことができた。」(全て原文ママ、以下同様)との感想が寄せられた。皆で世界に一步踏み出してみるのだ、と自覚させるというねらいは成功したと言えよう。



帰国生によるスピーチ



菊地教諭によるコース紹介

(2) LHRでの講演会、映画鑑賞会

2年次の1・2学期には、全体の事前学習会として講演会と映画鑑賞会を計3回行った。これらの企画により、台湾の文化や情勢をより詳しく知ることができ、台湾に行く意義を考える機会を得られた。

① 中川洋一郎教授講演会

2年次の9月1日、2学期始業式を終えた後に体育館で実施。講師は中央大学経済学部の中川洋一郎教授、それに2名の学生の方を迎えた。演題は「台湾で何を学ぶか——個の強さと国のありがたさ——」である。中川先生からは、日本統治時代に日台関係が頗る良好であったことのお話や、日本の為政のあり方が台湾の人々に好意的に受け入れられていた証となる数々のエピソードをご紹介いただいた。前章(p.44)で会の様子について述べてあるので、ここでは生徒の感想をいくつか挙げたい。「台湾にとって、日本の存在が大きかったのだと初めて知りました」「台湾に行くのがより楽しみになりました。台湾の人々と交流するのが少し不安もあったけれど、今回お話を聞いて大丈夫そうかなと思いました。」と、日台関係が良いことに安堵する声が上がると共に、「日本統治時代のことについてもっと調べてみたい。当時はどんな教育がなされていた

のか。日本統治時代が良かったという人がいることはわかったけれども、そうでない人はいたのかを知りたいです。いたとすれば、どんなことがダメだったか、また不満だったのかを知りたい。統治時代を経験していない人達も、どのように思っているのかを知りたい。」との声も上がった。会の中で繰り返された質疑応答（Ⅲ章詳述）に刺激を受け、先生のお話を自分なりにより多角的に捉えてみようという意識が芽生えた生徒も多く見られた。

② 映画「トロッコ」鑑賞会

10月のLHRを2時間分使い、映画「トロッコ」(2010)を体育館で鑑賞した。この企画を思いついたのは、1学期始業式に飯塚校長がお薦めの台湾映画として「冬冬の夏休み」(1984)と「トロッコ」を紹介したことに端を発する。台湾をより身近にイメージできるように、台湾映画の良さを皆で味わえるようにと企画した次第である。

「トロッコ」は、亡くなった台湾人の夫の遺灰を届けるために、妻と息子2人が台湾を訪れるというストーリーである。台湾で3人を待ち受ける祖父は日本統治時代を生き抜いた人であり、日本語を話し、優しく迎えてくれる。祖父の登場によって、9月に中川先生が話していた「日本語族」の存在を生徒は思い出していたようだ。「台湾と日本の繋がり深さをとても感じた」「おじいちゃんの『自分は日本人として戦っていたのに、日本はそれに向き合ってくれない』という言葉聞いて"植民地だった"ということから目を背けてはいけないなと思った」との感想が寄せられていた。全編を通して懐かしさや温かみが伝わる作品であり、生徒の感想にも「別れのシーンでおじいさんが言った『またいつでもおいで』という言葉に、日本と台湾は遠くないのだ、ということと、家族としての絆や人と人とのあいだのあたたかい関係性を感じることができた」とあった。「この映画では、祖父と孫をつなぐ父が欠けている（亡くなっている）ことから、日本統治時代の台湾と、現在の台湾の状況に対して、何もしてこなかった日本があるということも表しているように感じた」と、作品に潜むメタ

ファーを指摘し、テーマを掘り下げようとする感想も見られた。

(研修旅行終了から1ヶ月後、2018年2月6日深夜に台湾東部の花蓮市でM6.4の地震が発生した。花蓮はこの映画の撮影地である。「『トロッコ』の、あの大自然があったところですよ、募金してきました」と話す生徒もいた。研修旅行で直接訪れた地ではないが、今回の映画鑑賞により「力になりたい」という気持ちが湧いたという。)

③ 飯塚容校長講演会

11月のLHRで飯塚容校長(兼中央大学文学部中国言語文化専攻教授)を講師に迎え、「映画で知る台湾」をテーマに講演会を行った。飯塚校長は「さよなら・再見」(1987)「魯冰花」(1989)「非情都市」(1989)「無言の丘」(1992)「青春神話」(1992)「多桑 父さん」(1994)「恋人たちの食卓」(1994)「ヤンヤン 夏の思い出」(2000)「海角七号 君想う、国境の南」(2008)「セデック・バレ」(2011)の10編の台湾映画を紹介、作品に描かれる台湾の情勢や日本との関係、各映画の魅力等について解説して下さった。「台湾は日本の植民地時代から現在に至るまで、たくさんの事件を乗り越えてきたことが分かった。台湾に行く前に、日本は台湾に何をもたらしたのか、またそれらが現在の日台関係にどんな影響を与えたのかをしっかりと理解する必要があると思った。興味のある映画もいくつかあったのでぜひ見たい。」「日本が関係している台湾映画がこんなに多くあることに驚いた。『セデック・バレ』という映画の存在を知って、やはりの統治を良く思っていない人たちがいることを知った。一方、『多桑 父さん』では『日本の統治が良かった』と言っているそうだ。この人たちの意見の違いはどこからくるのか(どのような生活状況などが関わってくるのか)、観てみて知りたいと思った。」等の感想が寄せられた。



中川洋一郎先生講演会



「トロッコ」鑑賞会



飯塚容校長講演会

生徒はこの3回の事前学習を経て、それぞれの会の内容に関連づけながら、台湾の歴史と現在について考えを巡らせることができたのではないかと思う。

(3) その他の事前学習（課題図書制度の利用、シート記入など）

その他、以下の学習も行った。

①課題図書制度の利用

本校には現代文で年間30冊余、3年間で100冊読ませる「課題図書制度」があるが、その中で台湾にまつわる以下の4冊の読書を課した。

司馬遼太郎（2009）『街道をゆく 40 台湾紀行』朝日文庫／吉田修一（2012）『路』文春文庫／野嶋剛（2016）『台湾とは何か』ちくま新書／東山彰良（2017）『流』講談社文庫

②調べ学習&シートの記入

研修旅行の訪問先や台湾について調べたことや、本や映画の感想はすべてシートを用意して記入させ、ファイルで綴じて保管させた。ファイルは研修旅行専用のものを学年で作り（表紙は旅行委員のW君が書いてくれた。九份を模した絵である。写真参照）、旅行行程や諸注意、部屋割等もすべてこのファイルに挟んでいけるよ



うにした。

【調べたことを記入したシート】



台湾について調べたこと



共通訪問先について調べたこと



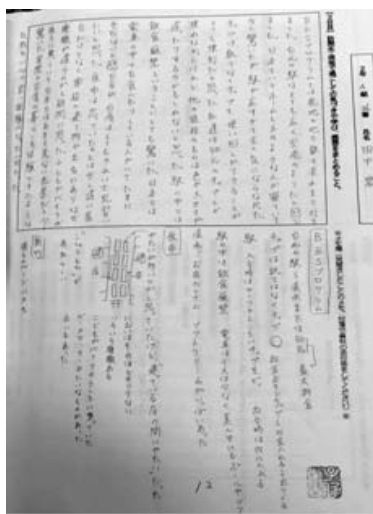
コース別訪問先について調べたこと

3. 現地での学習

現地で取り組むように指示したことは以下の通りである。

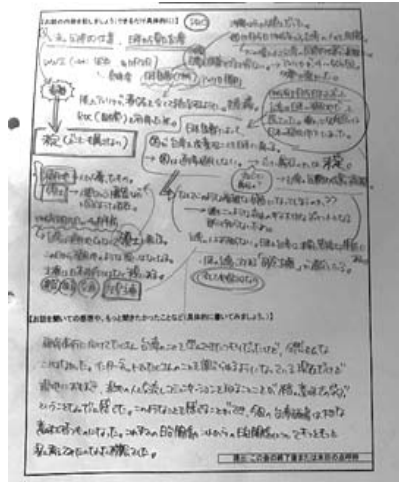
(1) その日の出来事や感想を記す

1日1枚分、下段のスペースには見聞きしたことや気づいたことをメモとして記しておき、上段の枠にはその日に経験したことや気づいたこと、学んだことを清書させた。(行程をこなすだけでいっぱいの日もあったので、そんな日は下段のスペースだけ書かせ、上段は後日現代文の授業で書かせた(写真右)。



(2) 友愛グループの方々との語り

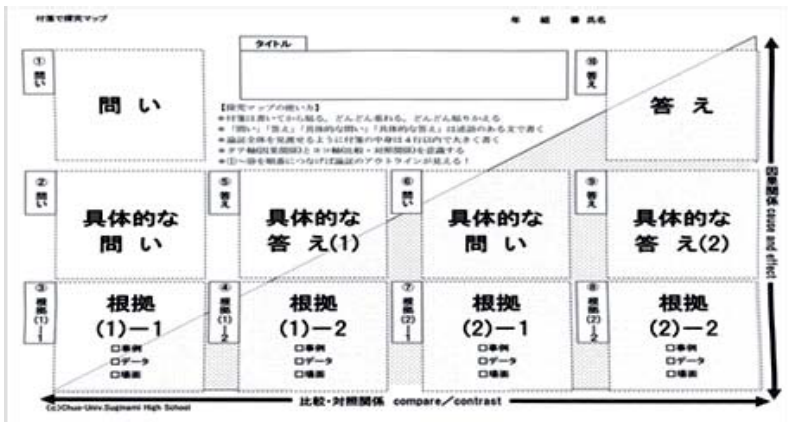
2日目の夜、友愛グループの方々と語らう際、聴いたお話の内容を上半分にメモし、感想を下半分に記入させた（写真下）。記憶や気づきが褪せないうちに、具体的に記すことを意識させた。



4. 事後学習

(1) 現代文での探究マップ作製

現地研修終了後、現代文の授業内で「探究マップ」を班ごとに作成させた。「探究マップ」とは本校で開発した論理を筋道立てるためのシートであり、プレゼン準備や論文執筆の際に使わせている。今回は、台湾研修をテーマに問いを立てさせ、根拠を挙げて意見を導くようにマップを作らせた。



各班が作ったマップをいくつか挙げてみたい。

① 「台湾における夜市の役割」

村岡で研究マップ

タイトル 台湾における夜市の役割

【研究マップの作り方】
 ●村岡は書いてから貼る。どんどん変わる。どんどん貼りかえる
 ●「問い」「答え」「具体的内容」「具体的な答え」は流石のある文で書く
 ●議論全体を把握できるように村岡の中身は3行以内で大きく書く
 ●タグ軸(同業同級)と並べ軸(縦横・対照関係)を意識する
 ●(1)～(3)のタグ軸(同業同級)と並べ軸(縦横・対照関係)が見える！

① 問い 台湾における夜市の役割とはどのようなものか。

② 問い 地元の人達にとって夜市はどのような存在か。

③ 議論(1) 台湾の会社員や学生は、夕食を夜市で食べるのが一般的。学生は放課後塾に行く人が多く、その前に夜市で夕食を済ませる。

④ 議論(1) 台湾は亜熱帯地域に属し、昼間は暑い。その暑さを避けて、比較的快適な夜に外出するのが一般的。

⑤ 答え 台湾の気候や食文化、ライフスタイルによって夜市は通っており、生活に欠かせない存在。

⑥ 問い 観光客にとって夜市はどのような存在か。

⑦ 議論(2) レトロな街並みでローカルな雰囲気を感じやすい。台湾の食文化をまとめて楽しむ、地元の人々の生活の様子を知ることができる場所でもある。

⑧ 答え 現在の台湾の様子だけではなく、歴史ある様子も感じることができ、観光の価値がある存在。

⑨ 議論(2) 私達が訪れた饒河街夜市は、崧山蘇祐宮という道教寺院の門前に発展した歴史ある夜市だった。文化的遺産としても価値がある場所。

夜市は台湾の人々の生活に密接に関わっているだけでなく、台湾の経済を支える観光資源としての役割も担っている。

↑ 同業同級関係(縦横)

↓ 対照関係(縦横)

※自分達も実際に訪れた夜市について、地元の人達から見た特徴/観光客から見た特徴と分けて述べており、どちらにとっても価値ある貴重な存在だと結論づけている。

② 『日本語族』と『哈日族』

村岡で研究マップ

タイトル 「日本語族」と「哈日族」

【研究マップの作り方】
 ●村岡は書いてから貼る。どんどん変わる。どんどん貼りかえる
 ●「問い」「答え」「具体的内容」「具体的な答え」は流石のある文で書く
 ●議論全体を把握できるように村岡の中身は3行以内で大きく書く
 ●タグ軸(同業同級)と並べ軸(縦横・対照関係)を意識する
 ●(1)～(3)のタグ軸(同業同級)と並べ軸(縦横・対照関係)が見える！

① 問い 台湾の人は日本のことをどう思っているのか。

② 問い 友愛会の方(「日本語族」)はなぜ日本が好きなのか。

③ 議論(1) 「日本が敗戦したとき、日本に軍切られたと感じたが、中国の政治の悪さを知ったとき、やはり日本は良かったと感じた」

④ 議論(1) 「私は日本人。」「中国人ということを知りたい。」「日本に行くのにパスポートが必要になってしまい、不便になった。」

⑤ 答え 「日本が好き」という思いは、日本統治時代をいい思い出にしている、仲間意識を持っているため

⑥ 問い 台湾大学の学生さん(「哈日族」)はなぜ日本が好きなのか。

⑦ 議論(2) 最も日本が好きと思っている人が58%
1番行きたい旅行先が日本人42%
TV番組から日本の最新情報を入手していて、日本のエンタメについて関心が高い

⑧ 答え 高齢の方々は、日本に帰属意識を持っているのに対し、学生は台湾に帰属意識を持っている。歴史の流れの中でそれぞれの立場から日本を好きだと捉えている。

⑨ 議論(2) 日本の若者文化やトレンドに興味を持っているため、日本を別の国として好きになっている。

⑩ 答え 「関西弁がかわいい」「日本が好き」「日本に遊びに行きたい」「日本料理はしょっぱい」

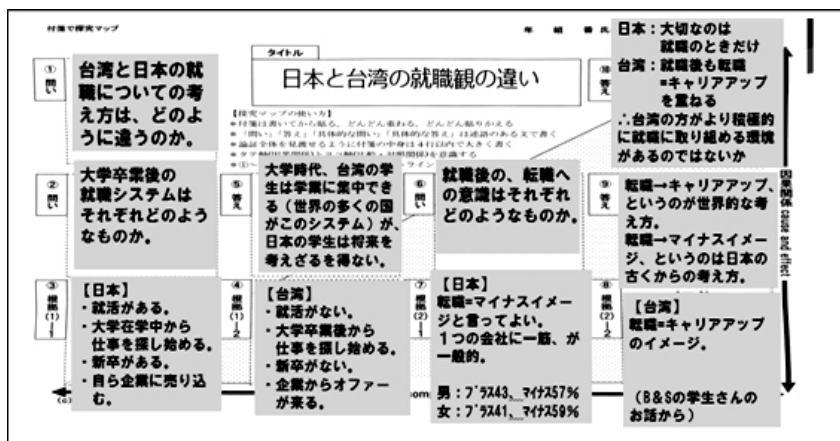
↑ 同業同級関係(縦横)

↓ 対照関係(縦横)

(c) Chou-Uchi Sugimori High School

※「日本語族」と呼ばれる友愛グループの方々と、「哈日族」と呼ばれる台湾大学の学生の方々は、同じ親日ながらどこが違うのかという問いを設定し、それぞれのアイデンティティを支えるものは異なっているのだという結論を導いている。

③ 「日本と台湾の就職観の違い」



※B&Sの大学生と街歩きをしながら話した中で話題に上った「台湾の学生の就職活動のしかた」に興味を持ったことから、日本とは異なる点を具体的に一つ一つ挙げ整理している。さらに「転職が持つイメージ」の違いも調査し、台湾の就職観の方が柔軟で積極的ではないかとまとめている。

台湾研修の意義を自分なりに言語化することにもつながり、このマップ作りは大いに有効だったと言える。マップを作った後はそれを紹介する形で発表させたが、「改めて研修を振り返れた」「班ごとにテーマが違って面白かった」と好評であった。ただ、マップ作りを行う際に、殆どの生徒が調べたいことをスマホ頼みにしてしまっていた。書籍をもっと活用させたり、信用性の高いデータのみ使うことを徹底させたりしなければならないことは今後の課題である。

(2) 研修旅行報告会の実施

現代文の授業内でマップ作りと発表が終わった2月、体育館で研修旅行の振り返りとして報告会を行った。以下のように3部構成のプログラムにし、司会やスライド操作は全て生徒が務めた。

【第一部 九份、十份、淡水、猫空など各訪問先の報告】

(1人1カ所、主に旅行委員が担当し、写真を使ってどのようなところだったか報告した。)

【第二部 B&Sの活動内容報告】

(4班が担当し、どのようなところに訪れたかを報告。台湾シャンプーや占い体験、國父記念館や遊園地に行く等の様々な活動を報告してくれた。)

【第三部 台湾についての調べ学習発表】

(現代文の授業内に行った発表から、特に良かった2班が発表。「台湾にはなぜローソンがないのか」「同じ炭鉱の街だったのに、夕張と違い九份が栄えたのはなぜか」を問いとして設定していた。班員全員で分担し、スライドを用いて、問いに対する根拠と導き出した答えを発表してくれた。)

報告会を終えての生徒の感想は次のようなもので、おおむね好評だったといえる。

- ・私が行かなかった所に行った人の話を聞いて、知らなかったことを知れたのでよかった。私が訪れた場所以外にも面白そうな所がたくさんあるのだと分かりました。また、私が行った所でも異なる視点で話していてとても興味深かったです。
- ・調べ学習の発表では、自ら訪れたからこそ浮かぶ疑問がテーマになっていて、現地に行くことでわかることがたくさんあるのだなとわかった。
- ・事後学習を通じて、台湾を表面的に学ぶだけでなく、より多面的に学ぶことができ、アウトプットし、理解を深めることができた。

- ・みんなとても面白い発表の仕方をしていて聞き飽きなかった。ここまで明確に台湾について語れることは、とてもこの研修に意味があったのだと思う。
- ・300人の前で発表するのはとても緊張したけどとても楽しかった。
- ・正直、台湾に行く前は「沖縄が良かった」と思っていたが、実際に行ってみると、初めての海外旅行ということもあって、とても楽しかったことを改めて思い出すことができた。いい報告会だったと思う。



研修旅行報告会の様子



(3) 事前事後学習に対する生徒の感想

事前事後学習を終えての生徒の感想を、以下に抜粋する。

【中国語の学習をやりたいかった】

- ・よく使う台湾の言葉などを勉強したいかった。・事前学習に中国語をすこしやっ
たほうがいい。

【事前学習の要改善点】

- ・課題図書に本が出たり講演会に来ていただいたりしたが内容が難しくあまり
頭に入らないまま台湾に行ってしまったので、自ら勉強することが大事だと

思いました。

- ・課題図書は、行った後に読むと面白いのではないか。
- ・事前学習をしたのが忘れてしまうくらい早くて、実際に台湾に行く時には忘れてしまっていたから、もう少し後に事前学習をやった方がよいと思った。事後学習については、思い出せるので、直後にやっていたよいと思った。

【事後学習が有効だった】

- ・やったことをまとめると気付くこともあるのだと思った。
- ・探究マップの発表が面白かった。台湾には自分の知らないことが多くあったが、それを旅行で終わらせるのではなく、日本に帰って自分の常識と照らし合わせることで、さらに多くのことを知れた気がした。自らの常識が形成し直されること、それが僕のグローバル化の一歩ではないだろうか。

振り返って反省するのは事前学習の内容とフォローの仕方である。現地に行くまでは自ら課題を見つけるような主体的な姿勢にはなりにくいであろうと、インプットが中心の学習を行ってきた。しかし、「今なぜこの学習をする必要があるのか」という意義の確認が十分でなかったため、「難しい」と頭に入らず、受け身のままだ座って学ばされている、と感じてしまっていた生徒もいたことは事実である。開催時期も検討する必要はあろうが、直前にあれこれなんでも詰め込むわけにはいかない。開催時期を見直すより、一つ一つの事前学習の意義を周知し生徒が学びに自覚的になること、事前学習においてもより主体的に取り組めるよう盛り上げるような工夫が必要であることを感じた。また、「中国語をやりたい」という意見が出たが、現地で役立つ楽しい講座も盛り込むとさらによいであろうと感じた。

事後学習の成果は多くの生徒が感じていた。現地に行った後、改めて気付くや学びを形にして発表する、というのは知的に楽しい活動であったようだ。「日本に帰って自分の常識と照らし合わせることで、さらに多くのことを知れた気がした。自らの常識が形成し直されること、それが僕のグローバル化の一

歩ではないだろうか。」生徒がこのような感想を寄せてくれたのは嬉しい限りである。台湾に行ったからこそ、自分を相対化して改めてグローバル化について考える——生徒の中では新たな問いが生まれ、今後さらにグローバル化する社会の中での自分の在り方を考えるきっかけとなったのではないだろうか。

5. おわりに～事前事後学習は、新たな問いを得るための学びである～

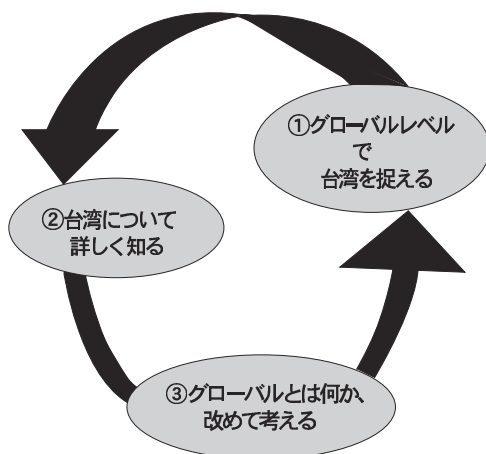
今回実施した事前事後学習は、生徒にとって次のような学びの機会になったと言えよう。

1年： 帰国生の話を聞く会——「グローバルレベルで台湾を捉える」

2年1・2学期：講演会&映画館紹介——「台湾について詳しく知る」

3学期：台湾研修報告会——「世界における台湾の位置を改めて捉え、グローバルとは何か、再び考える」

※これを図示すると、以下のような円環的な学びの構造図で表せる。



マクロ的視点で台湾を捉えた後、焦点化してミクロ的視点で台湾を捉える。このような学習を踏まえ、現地に行き、訪問後は改めてグローバル社会の中の台湾や日本、ひいては自分の立ち位置や役割を考える。このような学習の流れの中で、生徒は新たな視点を獲得し「グローバル」とは何なのかを考える機会を得、新たな問いをさらに掘り下げていくきっかけをつかむことであろう。今回の事前事後学習が、生徒の視野を広げ、かつ課題に対して真摯に考える姿勢を作る一助となっていれば幸いである。

(文責：Ⅰ・Ⅱ章大山、Ⅲ章菊地、Ⅳ章小泉)